経営のひろば

方丈記

現代に問う無常観

富山短期大学名誉教授　川中清司

方丈記が著されてから八〇〇年を迎えた。これまでは「無常観の文学」として受けとめられてきたが、東日本大震災に遭遇して改めて「災害の文学」として読み直されている。

●流暢　簡潔な名文

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にはあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しく止まりたる例なし。
世の中にある人と栖と、又かくのごとし。

長く読み継がれたこの随筆は、和文と漢文訓読体を織り交ぜた混淆文で口調が心地良い。当時としてはめずらしくカナ書きで字数は一万字たらず。表現が簡潔で対句法をとり入れ、巧みに比喩を用いる。

格調の高い文章は朗読にふさわしく、大方の人は口ずさんだことがあるに違いない。

流暢な文体の底には体験に基づく無常観が息づいていて、読む人の心を揺さぶる。

●音読で伝わる日本の心

その主とすみかと、無常を争ふさま、いわば朝顔の露に異ならず、或いは露落ちて花の残れり。残るといへども、朝日に枯れぬ。或いは花しぼみて露なほ消えず。消えずといへども、夕を待つ事なし。

人の生死も住居も無常を競う様子は、朝顔の露のようだ。露がこぼれて花が残っても、朝日に枯れてしまう。花がしおれて露が残っても、夕べまで待てはしない。

∞　∞　∞

名文はゆっくりと声に出して味わいながら読むのが良い。気持ちが落き着き伸びやかになり、響きにのって日本の心が染みこんでくる。

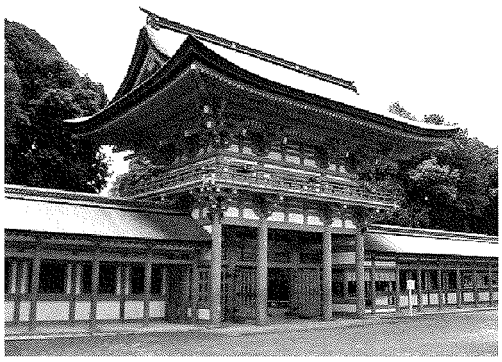
暗唱できるまで繰り返し、時折り口ずさめば活力を与えてくれる。それがやがて生涯を支える力ともなる。

一度や二度読んで字面で意味を考えても、奥深さは体得できない。頭で分かろうとしても果たせない。その時に応じて味わいが変わってくるものだ。方丈記を持ち歩き、思いついたときに引っ張り出しては読んでいる人も多い。

●貴族名門の鴨長明

方丈記の著者、鴨長明は、久寿二年（一一五五年）、下鴨神社の神職のトップの正禰宜惣官の次男に生まれた。葵祭で有名な大社で、鴨家はその氏神を祖先とする名門で代々社司を務めた。長明は早くも七歳のときに従五位下の位階を授けられている。

父の長継は、長明が一八歳のときに三四歳でこの世を去り、母とも早くに死別して祖母の屋敷に住み、孤独な境遇に育った。



鴨長明の京都下鴨神社・葵祭りで有名

●続発の天変地変

そのころ京都では地震、大火、暴風雨、竜巻、日照り、飢饉など

の天災が立て続けに起き、しかも何十年も続いた。京都の街中に累々と死骸が横たわり、死臭が漂った。長明はその生き地獄を体験した。

長明が生まれた翌年に保元の乱、その三年後の平治の乱と続き、都は戦乱の渦に巻き込まれた。世の中が貴族政治から平家一門の武家政治へと変わり、さらに源平が相争う激動期でもあった。

●末法の世と無常観

平安末期から鎌倉初期にかけて「末法の世」と信じられ、世の中に「無常観」が漂っていた。釈迦が入滅したあとに訪れると伝えられた、滅法の時代だ。

治承四年（一一八〇年）、平家軍は南都に僧兵を攻め、興福寺、東大寺が焼かれて大仏の首が溶け落ちた。「これぞ末世、末法」と日本中が無常感におののいた。

阿弥陀仏の救いによって極楽往生できると説く法然や親鸞なども、この時代に生きた。三〇〇年の後には「朝には紅顔ありて、夕べには白骨となる身なれば、早く後生の一大事を心にかけ、念仏申すべき」と、蓮如がこの教儀を広めた。

●五段の構成

方丈記の構成は五つからなっている。第一段では、世の中のすべては流転してやまず、無常であると説く。人も住家も同様だとして人生のはかなさと有為転変の世相を述べる。

第二段では地震、大火、辻風（竜巻）、飢餓など、相次いで巻き起こる天変地変のすさまじさを自らの体験から物語る。

「すべて、世の中のありにくく、わが身と栖との、はかなく、あだなるさま、またかくのごとし」と、身分、環境によって心を悩ますことは限りないと述べる。

第三段では五〇歳で出家して洛北の大原山の山中に隠棲し、さらに日野山で方丈の庵を結んだ経過と、四季の移り変わりや風物の景観から、仏教へのつながりを語り継ぐ。

第四段では、こうした日野の草庵で独りで暮らす平安を褒め、係累や朋友もなく煩わしさもない、その孤独と閑居のよろこびを語る。

終章では、間もなく終わるわが身を思い、修行の不徹底さと、草庵を愛し閑寂に固執し執着することが、仏の道に背くのではないかと自らに問いかける。その答えを得ないままに、二度三度、念仏を唱えると結んでいる。

●安元の大火

安元三年（一一七七年）四月、長明が二三歳のときに京都の大火が起きて、都の三分の一が焼失した。

左京の樋口富小路から出火して、たちまち炎は西北に広がり都大路をなめつくし、夜明けには北部の大内裏に達し、朱雀門や大極殿など、ことごとく灰燼に帰した。この大火事が元で、八月には年号も治承と改められている。

●治承の辻風

治承四年（一一八〇）四月に、京都の中御門京極付近で大きな辻風（竜巻）が起きた。その勢いはすさまじく六条大路までも通り抜けた。風は家や家財など、あらゆるものを巻き込み、木の葉のように舞い上がり、通過地点の家屋はほぼ全壊した。頑丈な門扉や垣根も吹き飛び、屋根板などが上空を乱れ飛んだ。

辻風は珍しくはないが、これほど大きな被害を受けた例はあっただろうか。何か神仏の警告なのか不審に思われた。

> 辻風は常に吹くものなれど、かかる事やある。ただごとにあらず、
> さるべきものの諭しか、などぞ、疑い侍りし。

●突然の遷都

その直後の六月ごろに突然、平清盛による福原（今の神戸市）への遷都が行われた。四〇〇年も続いた都が突然なくなって福原に移ることは、「いと思いの外なり」、まったく意外なできごとであり、世の中が不安と混乱に陥った。

「家はこばたれた淀河に浮かび、地は目の前に畠となる」、都は日ごと荒れはてていった。

ところが福原は「その地ほど狭く…北は山に沿いて高く」、新都の建設は遅々として進まなかった。

遷都の暴挙で平家は天下の批判をあび、各地で源氏の蜂起が起きた。八月に源頼朝が、九月に木曽義仲が挙兵、一〇月には富士川の合戦で平家が大敗を喫した。一一月になって清盛は再び京都に還ると発令した。

方丈記ではこの混乱を「世の乱れる瑞相とか聞ける」とし、むしろ良い前兆だと書いている。平家の横暴への批判が読み取れる。

●悪政への批判

こうした悪政を昔の善政と比べて糾弾している。昔の天皇は人家に立ち上る竈の煙が少ないのをごらんになると、民の生活を心配して、限度枠を超えてまで税の免除をされたと聞いている。

民を助けて社会を救済する意図からだ。それにくらべ、今の社会が、昔に比べていかに乱れているかよく知るべきだ。

●養和年間の飢饉と疫病

養和元年（一一八一年）から三年間、旱魃、大風、洪水に見舞われ、作物は実らず大飢饉が起きた。諸物価が高騰して疫病が流行り、数え切れない多くの死者がでた。

土塀のそばや道路の端で、餓死者が無数にでた。死体を処理する方法も知らず、死臭は京の街に充満した。腐爛して形が変わるさまなど、むごくて目を背けた。まして賀茂の河原などには死体が捨てられて、馬や牛車が通れる道もない。

> 築地のつら、道のほとに、餓え死ぬもののたぐひ、数も不知。取り捨つるわざも知らねば、臭き香世界に満ち満ちて、変はりゆくかたちありさま、目も当てられぬこと多かり。いはむや、河原などには、馬、車の行き交う道だになし。

●死母の乳房を吸う赤子

飢餓に苦しみながらも、わが身を捨てて妻や子に食べ物を与える肉親の情の切なさを目撃した。極限状態のなかで、人間愛に生き死んでいった人々を次のように描きだしている。

> いとあわれなる事も侍りき。さりがたき妻、夫持ちたるものは、その思ひ勝りて深きもの、必ず先立ちて死ぬ。その故は、わが身は次にして、人をいたはしく思ふ間に、まれまれ得たる食い物をも、かれに譲るによりてなり。されば、親子あるものは、定まれる事にて、親ぞ先立ちける。又、母の命尽きたるを不知して、いとけなき子の、なほ乳を吸いつつ臥せるなどありけり。

極めて憐れなこともあった。離れ難い夫婦仲の者は、愛情の深い者が決まって先に死んだ。自分のことは後にして相手をいたわり、運よく手に入った食べ物も相手に食べさせてしまうからだ。

親子の間では決まって親が先に死んだ。子を思う親心のほうが優るからだ。

母親の命が尽きたのも知らず、頑是ない乳飲み子が乳房に吸いついたまま眠っているさまもあった。

●平家の都落ち　栄華の没落

養和元年に清盛が没したあと、寿永二年（一一八三年）、義仲の軍勢が越中（富山県）倶利伽羅峠で平惟盛を破りついに都を包囲した。

平家の頭領を継いだ宗盛は、義仲の勢いに戦意を失い、再起をはかるべく西国に逃れ、栄華を誇った平家一門もついに没落の一途をたどることとなった。長明が二九歳の時だった。

●元暦の大地震

元暦二年（一一八五年）七月、都を大地震が襲い激しい余震が三カ月も続いた。大地震の直後の八月には改元され文治元年となった。この年の三月、平家は義経によっ

鴨長明 略年譜（1）

年号	年齢	事柄
久寿２年・1155	1	鴨長明、下鴨神社の正禰宜の次男に生まれる。
保元～平治・1156～59	2～5	保元、平治の乱。
安元２年・1176	22	法性寺九重塔に落雷、11月、洛中で火事。
安元３年・1177（8月治承に改元）	23	4月、**安元の大火**、左京の３分の１を焼失。6月、鹿ケ谷事件、12月、彗星が出現。
治承２年・1178	24	4月、洛中で大火。
治承３年・1179	25	2月～11月、洛中に大火、八坂塔を焼失。
治承４年・1180	26	4月、洛中に**辻風**（竜巻）、落雷の被害甚大。福原へ**遷都**し京都が荒廃、11月には京に還る。
養和元年・1181	27	旱魃で諸国で**大飢饉**、都にも餓死者が多数。2月、平清盛が没する。
寿永２年・1183	29	前年から飢饉と疫病で、死骸が路上に溢れる。地震・義仲が京に乱入・盗賊、放火相い次ぐ。

て壇ノ浦の合戦で滅亡し、一一月には源頼朝が守護・地頭を設けて世は鎌倉時代に入った。

すさまじい大地震のありさまは、この世のものではなかった。山は崩れ土砂が河を埋め、大地が裂けて水が吹きだし、岩が割れて谷に転がり落ちた。渚を漕ぐ船は波に翻弄され、道行く馬はよろけて足の踏み場が決まらない。

おびただしく大地震振ること侍りき。そのさま、世の常ならず。山は崩れて河を埋み、海は傾きて陸地をひたせり。土裂けて水湧きいで、巌割れて谷にまろびいる。渚漕ぐ船は波にただよひ、道ゆく馬は足の立処をまどはす。

都のほとりには、在々所々、堂舎塔廟、ひとつとして全からず。或いは崩れ、或いは倒れぬ。燼灰立ち上りて、盛りなる煙の如し。地の動き、家の破る、音、雷にことならず。

●出家のあとも著作活動

五〇歳の春、元久元年（一二〇四年）に長明は突然、出家して大原に隠棲した。

出家の理由は、下鴨神社の摂社・河合社の禰宜に就くことが内定したが、反対にあって果たせなかったことがあげられる。

しかし、ただ挫折のためだけではない。不自由な官職から離れて自由な世界に生きたかった。現実から逃げるのではなく、自分らしく生きようと決意したのだった。法号を蓮胤と改め仏門に入ったが、俗世との縁を切ったわけではない。むしろ精力的に芸術や著作などに励んでいる。

鴨長明 略年譜（2）

年号	年齢	事柄
元暦元年・1184	30	1月に暴風雨、2月に洛中で大火。
翌年8月、文治元年	31	7月大地震、余震続く・壇ノ浦合戦で平家滅亡。
建久4年・1193	39	8月、暴風雨で加茂川や桂川など氾濫。 1月、都に疱瘡（天然痘）が流行。
元久元年・1204	50	長明が出家して大原に隠棲。
承元2年・1208	54	4月、洛中に大火、夏に疱瘡が流行。 日野に庵を結ぶ・親鸞が配流、法然が没する。
建暦2年・1212	58	鎌倉に赴き、再三、源実朝と会う。 3月『方丈記』成る。
健保4年・1216	62	6月、長明が没する。

和歌に長じ「新古今和歌集」にも一〇首が選ばれ、琵琶など音楽の道もいっそう深めていった。鎌倉にまで出向いて将軍源実朝とも会い、和歌や蹴鞠を共にして四カ月ばかりも滞在している。

五七歳のとき「無名抄」をあらわし、六〇歳のとき「発心集」八巻をもあらわした。発心集は仏教の説話集で、浄土信仰や百二人の人物について詳しく書かれている。

その年の健保四年（一二一六年）六月に六二歳で亡くなった。

●方丈庵に暮らす日々

その間、承元二年（一二〇八年）五四歳のとき、日野の山中に一丈四方（四畳半の広さ）つまり方丈の庵をつくり閑居を始めた。

山中に身を置き自然の中に暮らす。春は藤の花を愛でて香りを楽しみ、夏はホトトギス、秋はヒグラシに聴き惚れて、冬には雪景色を眺めて人生と照らし合わせる。

庵での生活は仏道修行に精進してはいない。念仏を唱えることが物憂ければ、休んでもとがめる人も恥じ入る人もない。意識して無言の業をしているのではなく、独り住まいで話す相手もいない。そんな環境になく、戒めを破ることなどあり得ない。

春は藤波を見る。紫雲のごとくして、西方に匂う。夏は郭公を聞く。語らふごとに、死出の山路を契る。秋はひぐらしの声、耳に満てり。うつせみの世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪をあはれぶ。積もり消ゆるさま、罪障にたとへつべし。

もし、念仏もの憂く、読経まめならぬ時は、みづから休み、みづから怠る。

さまたぐる人もなく、また恥ずべき人もなし。ことさらに、無言をせざれども、独り居れば、口業を修めつべし。必ず禁戒を守るとしもなくとも、境界なければ、何につけてか破らん。

●執着心を捨てる

方丈記の最後の章では、残り少ない人生を世を逃れて山林に過ごし、仏の道を求める今の自分に対して、このままでよいのかと次のように厳しく問いかけている。

月が西に沈んで山際に近づくように、自分の余命もわずかだ。三途の闇路に向かおうとしている。もう何の愚痴や弁解もいらない。仏の教えは執着を去れということだ。

だが今、草庵を愛し独り静けさに拘るのも執着ではないのか。つまらない楽しみを述べて、時を無駄に過ごして良いものだろうか。

●周利槃特に及ばず

静かな夜明けにこうした道理を考え続け、自分の心に聞いてみた。世を逃れて山の中に住んだのは、心を修め仏道を求めるためだった。しかし姿は僧侶だが心は濁っている。住まいは仏の真似をしているが、あの周利槃特にも及ばない。

前世の報いで貧しく卑しい身に生まれた、自業自得で煩悩を断ち切れないのか、心が迷い狂ったのか、と。

周利槃特は釈迦の弟子で愚鈍であったが、掃除を通じて悟りの境地に達した人だ。教えられた教義一句をどうしても暗唱できず、己の愚かさを悲しみ釈迦に訴えたところ、「自分の愚かさを知る者こそ、智慧ある者なのだ。自分の愚かさを解らずに、自分が賢いと思う者こそ愚者だ」と諭され「塵を払い垢を除けよ」と一本の箒を渡され、その後はひたすらに掃除に励んだ。何十年も励むうちに、己の心の塵を払い落とすことが大事と悟り、遂に阿羅漢（聖者の境地）に達した。

●不請の阿弥陀仏 両三遍申してやみぬ

もしこれ、貧賤の報いのみずから悩ますか。はたまた、妄心のいたりて、狂せるか。
その時、心更に答ふる事なし。ただ、かたはらに舌根をやとひて、不請阿弥陀仏両三遍申してやみぬ。

方丈記の最終章で最も意味深い部分だ。通り一遍に訳せばこうなる。

「これは前世の報いで貧しく卑しい身に生まれたために、自業自得で煩悩を断ち切れないのか。迷いから狂っているのだろうか。こういう問にまったく答えられない。ごく自然にただ舌が動いて『南無阿弥陀仏』と、ほんの二、三べん唱えるだけだった」

最後まで自然に生きている長明の姿が浮き出ている。

●願わずとも救う仏の恩

この「不請阿弥陀仏」については、昔からいろいろな解釈がなされてきた。「己が心にさほど請い望まず、ただ口ずさみに念仏すること」とか、「無我に近い境地から自然に念仏が漏れ出た」。あるいは、「法会など儀式として祈る『奉請』に対して、儀をととのえないで唱えた念仏」という説もある。

これに対して、不請とは請い願わないという意味で、「こちらから請い願わなくても救ってくださる御仏への念仏」であり、「仏のほうから救ってくださる、そのご恩に感謝して思わず口走る念仏」という解釈がある。

私が住む福井県は、浄土真宗の盛んなところで、妙好人と呼ばれる在俗の篤信者もいた。今なお、こうした教義を信じて、毎日お念仏を唱え、感謝の気持ちで生きている人も多い。

自らは答えを示さず、読む人それぞれの解釈にまかすのが長明流とも言える。

●現代人への問いかけ

人は死の恐怖に脅かされ、現世への未練は断ち切れず、離別の寂しさに苦しむ。

昔のように修行によって脱却を求める人は今は希だ。そのままでいい、阿弥陀仏におまかせすれば救われる、と言われてもそれを信じようともしない。

こだわらず、自然のままで生きればよい。といっても生老病死の現実の苦しみから抜け出ることはできないままだ。方丈記の最終章では、長明自らが迷う姿を描きだして、答えを読者自身に問いかけたのかもしれない。

東日本大震災は極めて多くの課題を生んだ。国土を覆う放射能、栖に戻れぬ十数万の仮住者、深まる貧富格差、膨大な財政赤字、尖閣など外国脅威、政争に汲々の政治家など、現代の方丈記が描くべき異常は多い。今まさに八〇〇年の昔から鋭く問いかけられている。

【主な参考文献及び出典】
「通読方丈記」手崎政男（笠間書院）
「方丈記・不請の阿弥陀仏」手崎政男
「方丈記」武田友宏（角川ソフィア文庫）
「方丈記全訳注」安良岡康作（講談社）
「新訂方丈記」市古貞次（岩波書店）
「新訳方丈記」左方郁子（PHP）